

2009年 第20回福岡アジア文化賞授賞式 9月17日(木)

福岡アジア文化賞・アジアマンス20周年記念講演会 9月27日(日)予定

2001年大賞受賞者で、2006年ノーベル平和賞受賞者のバングラデシュの経済学者ムハマド・ユヌス先生を迎えて記念講演会を実施予定です。

最新情報は文化賞HP <http://www.asianmonth.com/prize> でご確認ください。



### アジアに染まる福岡の秋。

アジアマンス20周年記念事業(<http://www.asianmonth.com/>)にご期待下さい。

★アジア太平洋フェスティバル 9/18~20

★アジアフォーカス・福岡国際映画祭2009 9/18~27

★福岡アジア美術館開館10周年 第4回福岡アジア美術トリエンナーレ 9/5~11/23

#### その他実施予定の記念事業

☆アジアマンス20周年記念合同セレモニー

☆アジア映画フォーラム

☆「20年のあゆみ」パネル紹介展

☆アジアのコンテンポラリーダンス

☆釜山広域市姉妹都市締結20周年記念セレモニー

☆九響とアジアオーケストラとの共演

☆「福岡-釜山」映画祭交流事業

☆トリエンナーレ招聘作家によるワークショップ等

各受賞者の喜びの言葉を聞くにつけこの賞がアジア文化発展のため如何に重要な役割を果たしているかを実感し、市民の一人として誇りに思います。

魂に訴えかけてくる歌声と笛の音に心がゆさぶられました。来年もぜひ参加したい。

やっぱり、実際に色々見てきた人はすごい。一人で考えてたことにも、新たな方向性ってか、ヒントをいただいたって感じます。

福岡市民のアジアに対する想いを形にして

## 福岡アジア文化賞は 本年20周年を迎えます。

アジアって面白い!とフォーラムに参加させていただいてから特に思うようになりました。

お互いの感性をぶつけあった対談に感動しました。

授賞式なんてそんなに面白いものとは思わなかったのですが、行って本当によかった!同じアジア人のこと、自然に意思の疎通みたいなものがありました。

# 第19回 福岡アジア文化賞

報告書



FUKUOKA  
PRIZE



主催 福岡市  
財団法人よかトピア記念国際財団  
協賛 財団法人西日本国際財団  
キャセイパシフィック航空  
協力 福岡都市圏20大学  
後援 財団法人福岡アジア都市研究所

第19回 福岡アジア文化賞 報告書  
発行 福岡アジア文化賞委員会事務局  
〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市国際部内  
Tel 092-711-4930 Fax 092-735-4130  
e-mail acprize@gol.com  
<http://www.asianmonth.com/prize>

**福岡アジア文化賞 シンボルマーク**  
 万物の生命を養う大地の緑と、人々の混沌とした強大な情熱の赤。そのあわいには、太古より漂い続ける精神的エネルギーが常に渦をなしている。人間が秘めた制御しきれぬエネルギーも、諸要素との調和の中で循環し、総体においてはついに円環を成す。そうした多様かつ固有なアジア文化の世界をこのマークは象徴している。

アジア以外の国・地域

- 1 ジョゼフ・ニーダム● (中国科学史研究者) イギリス
- 2 ドナルド・キーン (日本文学・文化研究者) アメリカ
- 3 クリフォード・ギアツ● (文化人類学者) アメリカ
- 5 王廣武 (歴史学者) オーストラリア
- 6 ナム・ジュン・パイク● (ビデオ・アーティスト) アメリカ
- 9 スタンレー・J・タンハイア (人類学者) アメリカ
- 11 ベネディクト・アンダーソン (政治学者) アイルランド
- 13 アンソニー・リード (歴史学者) オーストラリア

- 7 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン● (カフワーリー歌手)
- 17 アクシ・ムフティ (民俗文化保存専門家)
- 15 ラーム・ダヤル・ラケーシュ (民俗文化研究者)

- 2 ラヴィ・シャンカール (音楽家・シタール奏者)
- 5 パドマー・スプラマニヤム (舞踊家)
- 8 ロミラ・ターバル (歴史学者)
- 15 アムジャッド・アリ・カーン (サロード奏者)
- 18 アシシュ・ナンディ (社会・文明評論家)
- 12 ムハマド・ユヌス (経済学者)
- 19 フォリダ・パルビーン (歌手)

- 13 キングスレー・M・デ・シルワ (歴史学者)
- 15 ローランド・シルワ (文化遺産保存建築家)
- 19 サヴィトリ・グナセーカラ (法学者)

- 4 ナムジリン・ノロバンザト● (声楽家)
- 17 シャグダリン・ピラ (歴史学者)

- 1 巴 金● (作家)
- 4 費孝通● (社会学・人類学者)
- 7 王仲殊 (考古学者)
- 13 張芸謀 (映画監督)
- 14 徐 冰 (アーティスト)
- 15 厲以寧 (経済学者)
- 17 莫 言 (作家)

- 16 タシ・ノルブ (伝統音楽家)
- 11 タン・トウン● (歴史学者)
- 16 トー・カウ (図書館学者)

- 1 ククリット・プラモート● (作家・政治家)
- 5 スパトラディット・ディツサク● (考古学・美術史学者)
- 10 ニティ・イヨウシーウォン (歴史学者)
- 12 タワン・ダッチャニー (画家)
- 18 シーサク・ワンリポードム (人類学・考古学者)

- 10 タン・ダウ (ビジュアルアーティスト)
- 14 ディック・リー (シンガー・ソングライター)

- 19 アン・ホイ (映画監督)

- 16 ドアンドウアン・ブンニャウォン (織物研究者)
- 7 ファン・フイ・レ (歴史学者)

- 8 チェン・ボン (劇作家・芸術家)
- 4 ウンク・A・アジズ (経済学者)
- 11 ハムザ・アワン・アマット● (影絵人形遣い)
- 13 ラット (マンガ家)
- 19 シャムスル・A・B (社会人類学者)

- 11 プラムディヤ・アナンタ・トウル● (作家)

- 1 黒澤 明● (映画監督)
- 1 矢野 暢● (社会学者)
- 2 中根 千枝 (社会人類学者)
- 3 竹内 實 (中国研究者)
- 4 川喜田 二郎 (民族地理学者)
- 5 石井 米雄 (東南アジア研究者)
- 6 辛島 昇 (歴史学者)
- 7 衛藤 清吉● (国際関係研究者)
- 8 樋口 隆康 (考古学者)
- 9 上田 正昭 (歴史学者)
- 10 大林 太良● (民族学者)
- 12 速水 佑次郎 (経済学者)
- 14 外間 守善 (沖縄学者)
- 17 濱下 武志 (歴史学者)
- 3 金元龍● (考古学者)
- 6 韓基彦 (教育学)
- 8 林権澤 (映画監督)
- 9 李基文 (言語学者)
- 16 任東権 (民俗学者)
- 18 金徳洙 (伝統芸能家)

- 10 侯孝賢 (映画監督)
- 18 朱 銘 (彫刻家)

- 3 レアンドロ・V・ロクシン● (建築家)
- 12 マリルー・ディアス=アバヤ (映画監督)
- 14 レイナルド・C・イレート (歴史学者)

- 2 タウフィック・アブドゥラ (歴史学者・社会学者)
- 6 クンチャラニングラット● (文化人類学者)
- 9 R. M. スダルソノ (舞踊家・舞踊研究者)

**CONTENTS**

福岡アジア文化賞の受賞者 ..... 1

福岡アジア文化賞とは ..... 3

第19回受賞者

アン・ホイ ..... 5

サヴィトリ・グナセーカラ ..... 7

シャムスル・A・B ..... 9

フォリダ・パルビーン ..... 11

授賞式・関連行事 ..... 13

広報活動 ..... 14

歴代受賞者名鑑 ..... 15

1 創設特別賞  
 2 大賞  
 3 学術研究賞  
 4 芸術・文化賞  
 ※数字は回数  
 ●は故人

## 福岡アジア文化賞の趣旨

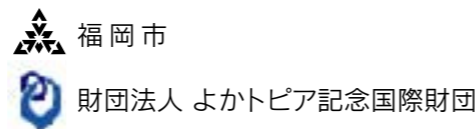
アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統をもつものを守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化においても画一化が迫られ、アジアの固有な文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、その固有で多様な文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本への文化の受け入れ窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の個性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解及び平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、19年間で77人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからは都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。



### 1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績をあげた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

### 2. 賞の内容

<b>大賞</b> 賞金 ¥5,000,000	アジアの文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより世界に対してアジアの文化の意義を示したもの。
<b>学術研究賞</b> 賞金 ¥3,000,000	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献したもの。 ※「学術研究」には、歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる。
<b>芸術・文化賞</b> 賞金 ¥3,000,000	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成や発展に貢献したもの。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる。

### 3. 対象圏域

東アジア、東南アジア及び南アジア地域

### 4. 主催

福岡市／財団法人よかとピア記念国際財団

## 5. 運営・選考組織

(1) 福岡アジア文化賞委員会

賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。

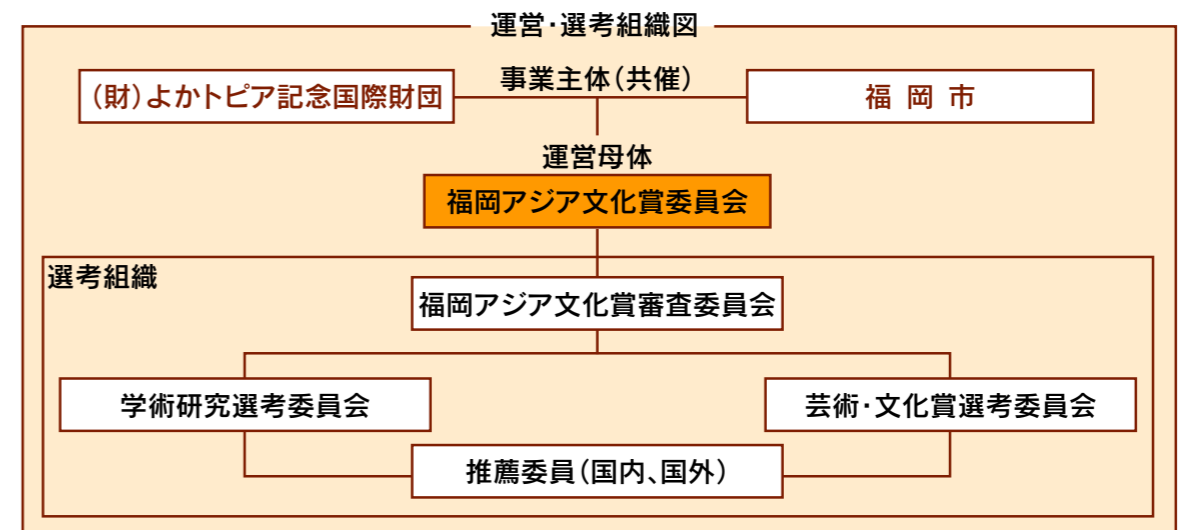
(2) 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会

各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞及び各賞受賞候補者を選出し、さらに、各賞の選考委員長等で構成される審査委員会で当該受賞候補者について審査し、受賞者を決定します。

※ 選考の公正を期すために選考委員・審査委員は候補者を推薦することはできません。

(3) 推薦委員

広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関等の関係者に、推薦を依頼しています。



## 第19回福岡アジア文化賞のあゆみ

2007.08 54か国・地域3,696人の推薦委員に第19回受賞候補者の推薦を依頼	2008.05 選考・審査合同委員会開催
2007.10 同推薦締切	2008.06 文化賞委員会開催、受賞者決定および福岡記者会見
2008.02 芸術・文化賞、学術研究賞各選考委員会開催	2008.07-08 海外記者会見
2008.03 審査委員会開催	2008.09 文化賞授賞式、市民フォーラム、学校訪問、文化サロン開催

## 第19回 福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	学術研究賞選考委員会	芸術・文化賞選考委員会
委員長 <b>梶山 千里</b> 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 <b>応地 利明</b> 京都大学名誉教授	委員長 <b>小西 正捷</b> 立教大学名誉教授
副委員長 <b>高田 洋征</b> 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 <b>末廣 昭</b> 東京大学社会科学研究所教授	副委員長 <b>安永 幸一</b> 福岡アジア美術館顧問
委員 <b>浅尾 新一郎</b> 国際交流基金顧問	委員 <b>石澤 良昭</b> 上智大学学長	委員 <b>石坂 健治</b> 東京国際映画祭事務局 アジアの風 プログラミング・ディレクター
委員 <b>応地 利明</b> 京都大学名誉教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 <b>稲葉 継雄</b> 九州大学大学院 人間環境学研究院教授	委員 <b>内野 儀</b> 東京大学大学院 総合文化研究科教授
委員 <b>川原 健</b> 株式会社ふくや代表取締役会長	委員 <b>清水 展</b> 京都大学 東南アジア研究所教授	委員 <b>川村 湊</b> 法政大学国際文化学部教授
委員 <b>小西 正捷</b> 立教大学名誉教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 <b>中村 尚司</b> 龍谷大学研究フェロー	委員 <b>田尻 英三</b> 龍谷大学経済学部教授
委員 <b>末廣 昭</b> 東京大学社会科学研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 <b>新田 栄治</b> 鹿児島大学法文学部教授	委員 <b>藤井 知昭</b> 国際文化研究所長
委員 <b>安永 幸一</b> 福岡アジア美術館顧問 芸術・文化賞選考委員会副委員長		委員 <b>藤原 恵洋</b> 九州大学大学院 芸術工学研究院教授



第19回大賞受賞者

アン・ホイ

Ann Hui

香港／映画監督

プロフィール

1947 中国・遼寧省鞍山に生まれる
1973 香港大学修士号(英語・比較文学)
1975 テレビ局TVBに入社、キン・フー監督に師事
1979 『瘋劫』で映画監督としてデビュー

1996 『女人、四十。』でベルリン国際映画祭銀熊賞等
2000 『千言萬語』で香港映画金像賞・最優秀作品賞
2007 『おばさんのポストモダン生活』で香港電影評論学会最優秀監督等

私は、香港の人々の喜びや苦しみを懸念に描く、一介の映画製作者です

「多様な文化が混ざり合う香港には異文化に対する大変な懐の深さがあります。また、香港の人々は「今」がすべてであり、今できる仕事、今できる遊びを一生懸命やります。さらに、香港の人たちは心の奥の深いところでは賢明で、ものを見る目をちゃんと持っているように私には思えます。スローガンやきれいなことを良しとせず、実用的で品位あるものに価値を置く、香港育ちの私は、こうした香港気質を受け継いでいます。私は自分のことを「芸術家」などと思ったことはありません。香港の人々の喜びや苦しみを懸念に描こうとしている、一介の映画製作者に過ぎません。

このたび栄えある賞をいただきましたが、香港という場所そのものが育み、与えてくれた、気取らない文化に感謝しています。」

(2008年9月10日、授賞式スピーチより)

日本人の献身的な仕事ぶり、心のこもった協力に感謝しています

「私の母は日本人です。成人して以来、日本で仕事をするのがよくあり、日本人の献身的な仕事ぶり、仕事に対する姿勢の素晴らしさを知りました。仕事のやり方も非常に組織的・計画的で、長い目でみると私たちのやり方よりも効率的でした。

20年ほど前に別府で『客途秋恨』を撮った際、無名の小さな外国の撮影班だったにもかかわらず、別府市長さん自らがサポートのためにと、1ヶ月の間、コーディネーターの方を私たちのところに差し向けて下さいました。20年の月日を隔ててはいますが、当時の別府市長さんの文化活動に対するご厚意、そしてコーディネーターの方の心遣いに感謝申し上げます。」

(2008年9月10日、授賞式スピーチより)

受賞理由

アン・ホイ氏は、現代の香港映画を代表する監督である。特にアジアの女性監督のパイオニアとしての功績は大きく、手がけるテーマの社会性、ジャンルの幅広さ、優れた演出力などの点で圧倒的な実績を残しており、世界の映画界の最も重要な人物のひとりである。

アン・ホイ氏(本名:許鞍華)は中国人の父と日本人の母との間に生まれ、幼少時に香港に移住。香港大学を卒業後、英国にて2年間の映画専門教育を受けて香港に戻り、武侠映画の巨匠キン・フー(胡金銓)監督の助監督を務めるとともに、テレビ・ディレクターとして数々のドキュメンタリーやドラマを手がけた。

1979年に『瘋劫(ふうきょう)』(英題:ザ・シークレット)で映画監督としてデビュー。ツイ・ハーク(徐克)、パトリック・タム(譚家明)らの新鋭とともに“香港新浪潮”(香港ニューウェーブ)の旗手として創作活動を開始した。香港新浪潮は、ほぼ同時期に東アジア各地で巻き起こったニューウェーブとも呼応しあい、アジアの映画、ひいてはアジアの芸術・文化の興隆を世界に向かって強く発信することとなった。

作風は、第一にベトナム難民をはじめとする時事的な

話題から高齢者の孤独、認知症、ジェンダーまで、つねに“いま”を強く意識した題材を取り上げる点に大きな特徴がある。とくに越境、流浪、故郷喪失といった、香港人にとって極めて切実なテーマが多くの作品のなかで中心的な位置を占めている。

第二にホラー、コメディ、歴史叙事詩からラブストーリー、ホームドラマまで、特定のジャンルに固執せずに横断する幅の広さに特筆すべき特徴がある。『瘋劫(ふうきょう)』から『おばさんのポストモダン生活』などの近作まで、どの作品においても高水準の演出力を発揮して豊かな感受性を体現するとともに、幅広い観客層から支持される平易な語り口と娯楽性が卓越した才能の証左となっている。

このようにアン・ホイ氏は1980年代から今日に至る香港映画の発展に多大な貢献をしてきたが、その作品は社会的な問題に鋭く踏み込み、内容の普遍性とそれを支える演出力の両面で、世界の映画人のなかでも特に高い評価を受けており、まさに「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい。

女性のフレキシブルな感性は国境を越えて 共催:九州大学アジア総合政策センター

「映画と文学の世界」と題して、大賞受賞者のアン・ホイ氏と高樹のぶ子氏の対談が実現。映画監督から見た文学の世界、小説家から見た映画の世界を話しながら、多くの共通点を見出した、参加者にも興味深い対談を紹介しよう。

第1部 対談 アン・ホイ×高樹のぶ子

司会者(石坂健治 東京国際映画祭アジアの風プログラミングディレクター)
アン・ホイ監督、今回の受賞おめでとうございます。アン・ホイさんと高樹さんは、ほとんど同年代、同世代。このお2人の対談は福岡ならではの対談です。

高樹 アン・ホイ監督を知るのには、代表的な作品である「客途秋恨」がいちばんいいと思います。第2次世界大戦の末期、その終了とともに日本に引き揚げてくるべき女性が、中国に残されて、中国の男性と結婚し、娘を産みます。その娘とお母さんは、なかなか理解し合えない関係。あるとき、お母さんの故郷である九州の別府にいる兄弟、娘にとつての伯父さんを2人で訪ねてきます。その旅で、お母さんが異文化や異国の中で苦勞してきたさみしさを娘が理解し、初めて母親と娘の関係が修復されていくという、国、民族、異文化、そして母親と娘の関係の的確に描いた、九州が舞台の映画です。

この映画の中で、中国本土の広州、香港、マカオ、日本と、それぞれの土地から伝わってくる、人を動かすものを感じました。監督はそういうことを意識して作られたのですか。

ホイ この映画を作ったのは20年前です。そのころ私は人間関係の物語にとっても興味があり、脚本家と話をして香港と日本の関係を描くような映画、その中に親子関係も描きたいということで、まずはこの2つの場所のコントラストを描こうと思いました。さらに、それぞれの地域のオーラ、感情といったものを描きたいと思いました。

高樹 私は福岡に住んでいますが、福岡を舞台にすると、あまり物語が動かないんですね。というのは、知り過ぎているからです。自分の生活空間から離れた所の方が、とても自由に物語が動くということが、私にはあります。監督はどうでしょうか。

ホイ 私もそうですね。ただ、最近は香港を舞台にしています。といひますのは、30年前に映画を始めたころと比べると、香港はずいぶん変わりました。どのような変化が香港に起きたかに、とても興味があります。それを香港の観客に伝えたいということで、今は香港を舞台にした映画作りが多くなっています。

司会者 最近、文学の方では芥川賞を中国の方が受賞されました。国籍に関係なく、日本語で書く方が芥川賞を取るというシンボリックなことがありましたけれども、高樹さんはこの動きをどういうふうにお考えですか。

高樹 中国語で育ってきた楊逸(ヤン・イー)さんが日本語で表現した「時が滲(にじ)む朝」が芥川賞を取ったことは、非常に画期的なことです。こういった異質なものであるものの受け止め方については、女性の方がフレキシビリティがあると思います。ですから、アン・ホイさんが描いている、国と国の感性の違いみたいなものが融和されていくには女性の感性がキーワードになると、私は感じています。

ホイ 私も女性の方が、その能力はあると思います。このことを含めて、これから上映される「おばさんのポストモダン生活」が様々なことを伝えてくれると思います。

第2部 映画上映「おばさんのポストモダン生活」

(2007年/110分)
香港電影評論学会最優秀監督賞・最優秀作品賞・最優秀女優賞受賞作品
監督:アン・ホイ
主演:斯琴高娃(スーチン・ガオワー) 周潤発(チョウ・ユンファ)

ホイ この映画は、実話に基づき撮影しました。コメディでもなく、悲劇でもない、不思議なストーリー展開でしたので、撮影にあたり様々な困難や不安がありました。しかし、「ジャンルを超えた描き方に加え、今の香港の諸問題、現実を描いている」と香港で好評で、非常にうれしく思っています。不安感を持ちながらも、前に進んでいくことは冒険ではありますが、いい結果を生むことをこの映画製作から学びました。(拍手)



創作観から小説の映画化、そして男女の感性にまで話題が広がる(右は高樹のぶ子氏)



学校訪問 9/12 福岡県立修猷館高校

修猷館高校の多くの学生を前に、日本人の母と中国人の父との間に生まれ、英国領の香港で育った自身のアイデンティティのことや作品でのエピソードを交えながら興味深い話をさせていただきました。学生時代は多くの本を読み、映画に興味を抱き、ロンドンの映画学校でさまざまな国籍や価値観を持つ学生たちとともに学んだこと、その経験から「事実や知識より自分の心をとらえるものを大切に、それに対して自分の想像力をいかに膨らませることができるかが重要」であることなどの話に、学生たちは目を輝かせ、充実した時間を過ごしました。



参加した1・2年生800人と和やかな時間を過ごしました。



第19回学術研究賞受賞者

サヴィトリ・グナセーカラ

Savitri Wimalawathie Ellepola GOONESEKERE

スリランカ/法学者

プロフィール

- 1939 スリランカ、コロンボに生まれる
1961 セイロン大学(法学)卒業、法廷弁護士の資格を得る
1963 フルブライト奨学生として米国ハーバード大学法科大学院に留学、法学修士号取得
1990~コロンボ、女性研究センター理事
1992~2003 英国、国際法協会、フェミニズムと国際法に関する委員会委員長
1999~2002 コロンボ大学副学長、国連女性差別撤廃委員会委員
2003~2004 東京、国連大学招聘講師

アジア各国が文化交流を深めていくことは、アジアの価値を高める

仏教の思想や教えでは、富と繁栄には社会的責任が伴うこと、共同体の幸福のためにこれら資源を使う責任を強く説いています。

これはグローバリゼーションと経済開発がもたらす利益を公平に分配するための重要な価値体系です。

今日のグローバリゼーションは、何かいかに新しいもののように語られますが、アジア大陸を貫いていた古のシルクロードも、今日と同様に域内の商業や文化をつなぎ、アジア諸国間のみならず、アジア大陸を越えた文化の共有を、何世紀も前にもたらしていました。いわゆるタニマチ文化(学術振興への財政支援)と物質的進歩の間のつながりを重んじる価値体系は、文化と伝統の最も良い側面を維持するという役割を果たすだけでなく、平和と発展への道にも

通じうるものです。

もう何世代も前のことですが、世界の指導者たちは、日本の和解と戦後の復興を後押ししました。繁栄と発展とは、平和がもたらす非常に大きな配当だということを、今の日本の姿は世界に教えています。

このように、平和や発展に向けた文化交流の大切さを認識し、息の長い取り組みを続けることは、アジアという素晴らしい地域を持つ時代を越えた価値を一層高めることでしょう。



(2008年9月10日、授賞式スピーチより)

受賞理由

サヴィトリ・グナセーカラ氏は、スリランカを代表する法学者であるとともに、高等教育改革に取り組む優れた教育者でもある。さらに南アジアにおける家族法、女性と児童の人権擁護とその法制史などに関する学術的な貢献をなしつつ、国際連合の諸機関やNGOなどにおいて実践的に活動する社会運動家でもある。学術研究と人権擁護の双方にまたがる境界領域において、後進の研究者や実践的な活動家の養成に努めるかたわら社会的弱者の権利を守る運動に取り組んでいる。

グナセーカラ氏は、1962年よりハーバード法科大学院に留学し、法学修士の学位を取得した。帰国後セイロン大学法学部の教員を経て、1977年から1982年までナイジェリアのアフマドゥ・ベロ大学法学部の講師として赴任。その後、スリランカにおける通信制高等教育機関の設立に尽力し、成果として1983年に設立されたオープン・ユニヴァーシティの初代法学科長に就任、その後学部長、副学長代行を歴任する。1999年にはスリランカで最も古い歴史を持つコロンボ大学の副学長に就任。スリランカ初の女性副学長であり、学界や専門職を志向する女性の希望ともなった。この間、国連大学をはじめ

め世界各地の研究機関にしばしば招聘されるとともに、ILO、UNICEFなど国際機関の活動に専門家として助言。また、スリランカの代表的なNGOである女性研究センター(CENWOR)の理事を務め、草の根レベルでの女性の地位向上運動も担ってきた。

グナセーカラ氏の主要な研究業績は、女性や児童の法的な地位や権利に関する分野であり、主著『児童、法律および正義：南アジアの視点から』(1998)は国内外で高い評価を受けている。同氏の社会的な活動は学術研究にとどまらず、植民地時代に制定された古い刑法が1995年に大幅に改正された際には、女性や子どもの権利擁護が実現されるよう尽力した。また、2004年のインド洋大津波に際しては、国連女性開発基金(UNIFEM)の資金援助により、沿海地方における被災女性の生活支援に力を尽くしている。

このように、南アジア、とくにスリランカにおける女性と児童の法的な権利に関する学術的な研究と、社会的な弱者を守る活動の両面において、国際的に高く評価されるグナセーカラ氏は、「福岡アジア文化賞—学術研究賞」の受賞者にふさわしい。

アジアを中心に、人権を国際的に考える

「アジア的価値観と人権」と題したサヴィトリ・グナセーカラ氏の講演と法政大学教授の多谷千香子氏、立命館アジア太平洋大学学長のモンテ・カセム氏をパネリストに迎え、龍谷大学研究フェローの中村尚司氏をコーディネーターとしてパネルディスカッションが活発に行われました。

基調講演：サヴィトリ・グナセーカラ
西洋で生まれた人権が、アジアからの視野や経験を取り入れて発展

「普遍的な人権」という考え方に対して、1993年の「バンコク宣言」に見られるようにアジアの一部諸国等では、アジアにはアジア的価値観があり、西洋的な人権概念は文化の押しつけであるという批判や、人権を理由に各国の内政に干渉されることへの懸念が示されることがあります。

私は、自分の経験や仕事から人権は非常に重要である。個々人のものであり、汎用的なもの、普遍的なものである。すべての人を、さまざまな対立、権利の乱用、虐待、抑圧などから守らなければならない。すべての人には、暴力のない、対立のない、平和な社会に住む権利があると考えています。

人権はもともと西洋の市民自由権に基づいたものですが、それが変わってきました。これを「権利の不可分性」といいます。われわれは現在、障害者の権利、高齢者の権利、子どもの権利といったグループの権利も重要であるようになっております。もちろん個人の市民自由権も重要です。新しい条約、例えば女性に関する条約、子どもに関する条約、高齢者に関する条約、障害者に関する条約はすべて、市民自由権と教育、健康などの両方に主眼を置いています。時がたつにつれ、家族の重要性が認識されるようになりました。そして、コミュニティとコミュニティの権利が重要視され、愛情、尊敬を持った関係が大事になってきたわけです。例えば、子どもに対する責任、良い市民となるべく、良い環境の中で育てていくという責任です。児童虐待があったり、暴力があったりという状態であれば、国家に介入する責任があるということです。これが人権における家族のコンセプトです。だからこそ、日本を含め、アジアの多くの国々で、ドメスティックバイオレンス防止法が制定され、児童虐待防止法が制定されました。この目的は、必要な場合には介入することです。

南アジアの国を考えてみてください。インドのように、非常に大きな経済成長を遂げている国がありますが、教育と医療の保障も国家の責務であり、これを放置すれば不作為の責任を問われます。そしてまた、国家以外の主体である企業も、やはり責任を負います。違う分野ではありますが、責任を負うわけです。西洋の伝統的な慣習の中では、人権侵害に関しては国家だけの責任であると考えられていましたが、最近では、国



家だけでなく、非国家的な主体も人権に対する責任を負うと理解されてきております。

国際的人権は、もともとのルーツから大きく展開しております。もともとは西洋の伝統に基づいたリベラリズムでした。アジアを含むさまざまな地域が、この展開に大きく力を注いでいるわけです。国内・国際的な見地から大きく貢献しているわけです。そして、多くの分野、特に人権の解釈、子どもの権利、女性の権利、平等の意味、差別、虐待、搾取といった概念における貢献によって、憲法であれ、法廷の場であれ、人権の意味合いが広がり、最終的には国際的な基準がそれぞれの国に当てはまる形になるわけです。

コーディネーター
中村尚司(龍谷大学研究フェロー)

サヴィトリ先生の言葉の中に、スリランカの現代社会、政治の状況に対する深い悲しみと、それを乗り越えて、いかに希望を見出すかという秘められた思いを感じました。先生のおっしゃるアジア的価値は、アジアに限らずアフリカなどの他の地域も含め、もっと広範な人類の挑戦の歴史が背景にあったという思いを持ちながら、拝聴していました。



パネリスト
多谷千香子(法政大学教授)

人権に関する考え方だけではなく、伝統や宗教、コミュニティなども変化しています。伝統を理由に差別を温存することなく、むしろ西洋的な人権を入れて解釈し直すこと、そして、人権がエボリューション(進化)していき、世界の人権のスタンダードに貢献していくことが、アジアとヨーロッパをつなぐ人権の解釈ではないかと思っています。

パネリスト
モンテ・カセム(立命館アジア太平洋大学学長)

人間が社会を構成して共に生きる上で、法律のような「決まり」の力と、変化する現実に対応して解決策を見出すための人の「集まり」の力とは、車の両輪の関係ですが、人権に関しても同様だと思います。既存の「決まり」が壁にぶつかるときには「集まり」が力になり、社会を進化させるのです。そしてそのために、自由な言論を保障するためのメディアと、社会性と良心を醸成する教育機関の存在が重要であることはいうまでもありません。

学校訪問 9/12 筑紫女学園中学校

講堂を埋める中学校全校生徒に向かって、世界の子どもが置かれている状況や子どもの権利を守るための国際社会の努力について講義。最後に、「幸運に恵まれた人はそれに応える責任があります。この環境で素晴らしい教育を受けられるあなた方には、それに応える努力を期待します」と生徒たちを激励し、世代、国、文化を超えた交流のひとつとなりました。



760人の生徒が聞き入りました



「事実、知識より想像力を膨らませることが重要」



第19回学術研究賞受賞者

シャムスル・アムリ・バハルディーン

Shamsul Amri Baharuddin

マレーシア/社会人類学者

プロフィール

- 1951 マレーシア、ヌグリ・スンビラン州ジュンボルに生まれる
- 1976 マラヤ大学修士号(開発社会学)
- 1983 オーストラリア、モナッシュ大学博士号(社会人類学)
- 1986 フランス国立科学研究センター 客員研究員
- 1999~2007 マレーシア国民大学マレー世界・文明研究所(ATMA)所長
- 2003~2007 マレーシア国民大学西洋学研究所(IKON)初代所長
- 2007~ マレーシア国民大学民族問題研究所(KITA)初代所長
- 2007 マレーシア国王よりダトゥの称号を受ける

社会科学の研究は、時間をかけて認知されるもの

マレーシアはわずか一世代のうちに近代化と産業化を成し遂げようとしている国です。そんな国で、私が一社会学者として立ち向かう課題は、かつてないほどますます厳しく、難しいものになりつつあります。社会科学の研究活動は、認知知(cognitive knowledge)に基づくもの。それらが持つインパクトははっきりしたものではなく、より広範で深遠なものであり、社会機能のダイナミクス(力学)の中にゆつくりと吸収され、染み込んでいくものであるため、ある程度の時間をかけて初めて認知されるものです。

今後学術文化活動を通じて、「人類のため、人類の進歩のための人文社会科学」の意義と地位を高めていきます。

(2008年9月10日、受賞スピーチより)

マレーシアのキーワードは「意識的(コンシャス)」

マレーシアは多民族国家です。キーワードは「自分たちの違いに対して意識的であること」。

多様性をうまく管理して、国家として生き残っていくためには、「意識的(コンシャス)」という言葉が重要です。まずトップダウンの努力、政府から人々に対する語り掛けが重要であり、逆にボトムアップ、人々から政府に対する働き掛けも重要です。双方からの取り組みによって、バランスを保っていくことができると思います。

(2008年9月14日、市民フォーラムでの講演より)



受賞理由

東南アジアを代表する社会人類学者であるシャムスル・アムリ・バハルディーン氏は、典型的な多民族社会であるマレーシアが抱える民族間の融和、宗教対立の解消、貧困の軽減という課題を正面から取り上げ、学術研究、社会評論、教育活動の3つの分野で顕著な業績を挙げた。

シャムスル氏は1951年、首都クアラルンプールに隣接するヌグリ・スンビラン州に生まれ、世界でも数少ない母系制社会で育った。マラヤ大学で人類学と社会学を学び、1983年にオーストラリアのモナッシュ大学で社会人類学の博士号を取得。主著『英国統治からブンプラ統治へ』(1986年)はオイルパーム・天然ゴムを栽培するマレー半島西部の村落を調査地を選び、民族・宗教・政府の政策が複雑に絡むマレーシア政治の実態を、草の根レベルから初めて明らかにした。氏は「民族のアイデンティティ」(マレー人らしさなど)を、植民地支配の歴史、開発政治の展開、人々の日常生活の3つから捉え直すことを提唱する。公文書館の史料を駆使した歴史研究、独立後の農村開発の展開を詳しく追った政策研究、村落での緻密なフィールドワークを見事に統合したこの

本は、世界中から高い評価を獲得し、現在ではマレーシア研究の古典とみなされている。

シャムスル氏の活動は学術研究にとどまらない。国立言語局の社会評論雑誌などを通じて精神的に社会問題を論じ、海外に対しては、BBC、ABC、NHKなど世界のマスメディアの要請に応じて、アジアの民族・宗教問題を熱く語ってきた。

氏の活動の国際性は、ドイツ、デンマーク、シンガポール、アメリカ、日本などの大学・研究所が、こぞ彼を客員研究者に迎えたことから分かる。同時に、彼は類まれな研究の組織者・教育者でもある。マレーシア国民大学(UKM)のマレー世界・文明研究所(ATMA)の再建、民族問題研究所(KITA)の創設、他民族理解を目的とする大学共通のカリキュラム編成などによって、民族問題の研究と教育の水準を著しく引き上げた。

このように、シャムスル氏は民族関係・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードし、人々の理解を深める上で多大に貢献したことで、世界的にも高い評価を獲得しており、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞」にふさわしい。

多民族・多文化社会、マレーシアの経験

「多民族・多文化社会、そして一つの〈国民〉:マレーシアの経験」と題したシャムスル・アムリ・バハルディーン氏による講演に続いて、パネルディスカッションが行われました。マレーシアやスリランカ等各国の多民族社会をフィールドとするパネリストから興味深い事例や意見が示され、質疑応答の際には会場からの質問が相次ぎ、多民族・多文化の共生に対する市民の関心の高さがうかがえた。

基調講演:シャムスル・アムリ・バハルディーン

人々の経験を豊かにする、マレーシアの多様性

マレーシアは、一つの国家、そして多民族・多文化の国です。先住民であるマレー人が約50%、華人が23%、そのほかの先住民が11%、インド系が7%、そのほかが7%で、シャム民族、ユーラシア大陸のどこかの民族、パキスタン人、ヨーロッパ系の民族も含まれています。宗教についても、イスラム教、仏教、キリスト教、ヒンドゥ教があり、儒教、道教、シャーマニズム、中国から来たさまざまな宗教などがあります。民族の多様性をさらに複雑化させているのが宗教の多様性だといえます。言語もマレー語、英語、北京語、タミル語、ボルネオで話されているカダザン語やイバン語があり、地方言語が200もあります。

つまり、この国でわたしたちは、非常に豊かな多様性を形成しています。世界の多くの研究者から「多様性は利点か。あるいは欠点か」という挑戦的な質問を受けますが、わたしは「マレーシアの多様性は、人々の経験を豊かにするものだ」と答えています。

マレーシアでは、皆が異なった存在であることを知っています。人が違えば、好みも違い、求めるものも違います。では、多様性による違いを、どのように扱っていけばいいのでしょうか。多様性はあってもいいわけですが、それをうまくコントロールしていかなければなりません。そうしなければ、爆弾を抱えたような国家になってしまいます。さまざまな方法を用いて、異なるもの、多様性への対応をうまく管理していくことができると思います。

マレーシアの将来については、2大政党システムが必要だと考えます。これにより、チェック&バランスが提供できると思います。また、国として生き残っていくためには、ノンストップで、社会のすべてのレベ



学校訪問 9/12 福岡県立筑紫丘高校

シャムスル氏の「Apa Khabar!(マレー語で『こんにちは』)」の一声で講義が始まり、生徒から世界平和が来る日があるのか、民族紛争解決について何が大切かなど、最近の世界の動きに通じる質問が飛び交いました。シャムスル氏は多文化共生には、相手のコミュニティを知り、互いの社会文化を理解することが重要と話されました。また、同行した奥様のウェンディさん(オーストラリア出身)もマイクを取り、「シャムスル氏との結婚生活は、多文化共生の実践そのもの。互いの価値観を認め合うことが前提です。」と話すとき

ルで交渉を続けていくことが重要だと思います。「わたしたちの文化を認めてもらう」というバーゲニング(交渉)を行っていくことが必要だと思います。これは重要であり、現在も効果を発揮しています。

シンポジウム

新たな国づくりにチャレンジしているマレーシア

コーディネーター

末廣 昭(東京大学社会科学研究所教授)

マレーシアは「マレー人」のみの国家ではなく、たくさんの民族、たくさんの文化をベースにつくられており、それを尊重しながらも、一つの国、一つの国民である、つまり「マレー人」ではなく、「マレーシア人」の新しい国をつくろうという、大変な実験を行おうとしています。

パネリスト

鳥居 高(明治大学商学部教授)

多民族国家であるマレーシアのマネジメントはうまくいっていると私は考えます。その理由の1つは民族間のルールという憲法の規定があること、2つ目は非常に巧みな政治の仕組みがあること、3つ目は持続的な経済成長をしたこと、4つ目は、シャムスル先生の最後のサイコロジカルというお話と部分的に一緒になりますが、民族紛争を記憶していることです。この4つの理由で、この国はうまくいっているのです。

パネリスト

清水 展(京都大学東南アジア研究所教授)

東マレーシアにあるサバ州の場合、半島部のマレーよりもさらに民族の共生が進んでいます。シャムスル先生が文化的、民族的な多様性の重要性をおっしゃいました。違うことが大事だということです。国際結婚が増え、外国人労働者が入ってくるなど多民族社会になっていく日本社会にとっても、サバ州あるいはマレーシアは一つのお手本になるだろうと思います。

パネリスト

小野山 亮(NGO福岡ネットワーク)

スリランカは同じ多民族国家のマレーシアと違って、不幸にも民族紛争が起こっている状況です。攻撃行為自体をやめて、対話や正義を実現することが求められるのではないかと、その中で地方への分権、少数民族や市民の権利保護を進めなければならないと思います。マレーシアのように平和で豊かな社会になることを願い、今後も日本の市民社会として何が出来るか、努力をしていきたいと思っています。

な拍手がわきました。身近に多文化の共生を考え、世界に眼を向けるきっかけとなった課外授業でした。



文化の違いを理解しながら共に生きることの大切さを学びました

## ユネスコ無形世界遺産「バウル・ソング」の夕べ

フォリダ・パルビーン氏の圧倒的な歌唱力とハルモニアムの柔らかな音色にメンバー4名の伝統楽器が奏でるリズム、『バウル・ソング』は多くの参加者を魅了した。アンコールを含む全7曲の歌と演奏の合間にはコーディネーター藤井知昭氏による解説、フォリダ氏へのインタビュー、メンバー及び楽器の紹介も行われた。

### 出演

フォリダ・パルビーン(歌・ハルモニアム)  
ガジ・アブドゥル・ハキム(バンスリー)  
シェク・ジラル(ドトラ)  
デベンドロ・ナッツ(タブラ)  
レザ・バブ(ドール)

### 解説

藤井知昭(国際文化研究所所長)



幻想的な雰囲気ステージ



バンスリー(竹笛)の演奏は、フォリダさんのご主人のガジ・アブドゥル・ハキム氏。彼はバングラデシュにおけるバンスリーの第一人者であり、日本をはじめ、世界中の国々を歴訪している。



ハルモニアム(アコーディオンの一種)を演奏しながらのフォリダさんの熱唱



4~5弦の三味線系撥弦楽器ドトラ



両面を叩く形の太鼓、ドール



高音と低音の2つの太鼓がセットになったタブラ



幕間のフォリダさんと藤井氏のトーク(左は通訳のアロム・シャヘさん)



演奏後も会場で余韻に浸る参加者のみなさん

### 学校訪問 9/11 福岡市立板付中学校

カラフルな歓迎横断幕とバングラデシュの国旗で飾られた体育館に、フォリダ氏は黄色や緑の鮮やかな色、演奏メンバー5名は純白の衣装を身にまとい登場しました。全校生徒が大きな拍手で迎え、バウル・ソング演奏の間中、会場はフォリダ氏の迫力ある歌声と時には力強く時には優しく響く伝統楽器の音色に包み込まれました。伝統楽器についての紹介では、初めて目にする楽器に身を乗り出して見入っていました。フォリダ氏は「生徒たちに熱心に聞いてもらい、とても気持ちよく歌えて、楽しい経験だった」との感想を話されました。



「バウル・ソング」が500人の生徒を惹きつけました



素晴らしい演奏をありがとう

## 第19回 芸術・文化賞受賞者

### フォリダ・パルビーン

Farida Parveen

バングラデシュ/歌手



### プロフィール

- 1954 バングラデシュ、ナトールに生まれる
- 1959 音楽家ウシュタド・カマル・チョクロホルティからサルガム(インド音階)の基礎を学ぶ
- 1961 音楽家ウシュタド・イブラヒムに師事、古典音楽を学ぶ
- 1987 エクシェイ・パドック賞(バングラデシュにおいて民間人に対し贈られる最高賞の一つ)受賞
- 1993 バングラデシュ国民映画賞の女性歌手(プレイバックシンガー)部門最優秀賞
- 2002 1ヶ月に及ぶ日本ツアーを実施。山形・仙台・東京・横浜・広島など各地で公演
- 2006 フォリダ・パルビーン財団(同年に設立)会長に就任
- 2008 ダッカ、オルタナティブ開発大学 名誉教授

### ラロン・ソングを通じて、人類愛を伝えていきます。

ラロン・ソングに出合って感動し、ラロンの歌と哲学を知れば知るほど、より多くの新たな悟りが生まれてきました。私は、シンプルさというのは、人類愛を現実に表現したものなのだと思うようになりました。人間の完全な自由と幸福は、シンプルでゆったりとした生き方の中にあります。私は自分のことを単なるラロン・ソング歌手ではなく、ラロン研究者であり、ラロンの思想を伝える活動家でもあると思っています。戦争や衝突が増えつつあるこの世界で、ラロン・ソングを通して人々にメッセージと人類愛を伝え、広めています。

### 日本とバングラデシュの人々の人生哲学に見る類似点

日本の人々とバングラデシュの人々の間には、地理的に大きな隔たりがあり、人類学的な違いもあります。しかし、私は双方の人生哲学の中に、素晴らしい類似点を見つけました。それはシンプル(簡素さ、素朴さ)であること、わかりやすく単純な命の感覚です。どんなに技術が向上し、消費社会が拡大しても、この2つの地域の大半の人々は、生き方や姿勢において、自然体でのんびりしていて、誠実です。バングラデシュでラロンや彼の歌、そして彼の哲学が伝えられているのまさにこの点であり、日本をはじめ世界中に通じる教えなのだと感じています。

(2008年9月10日、授賞式挨拶より)

### 受賞理由

フォリダ・パルビーン氏は、ベンガル地方の伝統的な宗教歌謡バウル・ソングに新たな生命力を吹き込んで、現代に蘇生させるとともに、テレビや映画をはじめ、国際的にも活躍しているバングラデシュを代表する歌手である。

フォリダ氏は、1954年に現バングラデシュ西部のナトールに生まれ、クシュティアで育ち、幼時よりインド音楽の基礎を学んだ。6歳から著名な音楽家ウシュタド・イブラヒムに師事して古典音楽を研鑽し、13歳の時からラジシャヒのラジオ局の歌手として活動を始めた。ベンガル地方では、古くから神と人の合一を説く教えが人々の生活に深く影響を与えており、その修行者であり、教えを歌って各地を流浪する吟遊詩人とも称されるバウルたちが活躍していた。

その中でも、18~19世紀における最高のバウルとされ、タゴールにも大きな影響を与えたラロン・フォキルが拠点としたクシュティアでは、ラロンを讃える祭りが毎年催されており、ここで歌われるラロン・ソングとの出会いによって、フォリダ氏はラロンの数多くの歌の収集や分類を始め、歌手としての活動を発展させていった。

また、ラジシャヒ大学でベンガル文学を学ぶ傍ら、ラロン・ソング以外にも愛国歌、独立戦争などの歌を歌い、全国的な人気歌手としての地歩を築いてきた。

LPレコードの出版をはじめテレビ・映画の歌手として活躍し、1987年にはエクシェイ・パドック賞(バングラデシュにおいて民間人に対し贈られる最高賞の一つ)を受賞し、1993年には、バングラデシュ国民映画賞の女性歌手(プレイバックシンガー)部門最優秀賞を受賞するなど、バングラデシュを代表する歌手として高い評価を得ている。

さらには2002年の日本公演をはじめ、フランス、アメリカなど、国際的にも活動を広げ、バウル・ソングを世界に紹介している。

フォリダ氏は、インド古典音楽を基礎にしながら、豊かな歌唱力によってバングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、ユネスコの無形遺産のなかの世界遺産認定に導くなど、その価値の向上と国際的な普及に対する功績は大きく、まさに「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい。

授賞式

9/10(水) 18:00~19:40  
アクロス福岡シンフォニーホール 参加者: 1,100人

秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、多くの市民や留学生、文化関係者など1,100名が見守る中、アグネス・チャンさんの司会で、式典が進行しました。

第1部では、映像で受賞者の業績を紹介した後、会場から盛大な拍手に迎えられ受賞者が入場。主催者挨拶、秋篠宮殿下のお言葉、選考経過報告が行われ、各受賞者に賞状とメダルが贈呈されました。続いて各受賞者がスピーチを行い、受賞の喜びやアジアの文化に対する思い、市民へのメッセージなどを語りました。最後に、福岡インターナショナルスクールの生徒たちから花束が手渡され、会場は再び大きな拍手につつまれました。また、エスコート役として、筑紫女学園大学アジア文化学科の学生たちが和服姿で式典に華を添えました。

第2部では、和やかな雰囲気の中で4人の受賞者とアグネス・チャンさんとの対談が行われました。続いて、市民を代表して、福岡大学4年の谷口由華さんから受賞者へのお祝いの言葉。最後は、芸術・文化賞受賞者フォリダ・パルビーン氏によるバウルソングの演奏で、幕を閉じました。



吉田市長のご挨拶 鎌田理事長より賞の贈呈 司会のアグネス・チャンさん 受賞者揃って笑顔で 受賞の記念演奏

■秋篠宮同妃両殿下ご臨席

秋篠宮同妃両殿下に第19回授賞式にご臨席を賜りました。式典で秋篠宮殿下より「福岡アジア文化賞は、アジアにおける文化の保存と創造に貢献することを目的とするものであり、その意義は大変重要でかけがえのないものです。本日受賞される方々の業績は、アジアの文化に対する貢献のみならず、世界に対してその意義を広く示し、人類社会全体を豊かにするものであるといえましょう。」と受賞者を讃えるお言葉を述べられました。



受賞者懇談会

9/9(火)

4人の受賞者が初めて一同に会する主催者による歓迎懇談会。

祝賀会

9/10(水)

授賞式を終え少しリラックスした中での祝賀会。ジュニー・チョック香港経済貿易代表部首席代表やバングラデシュのマジブル・ラーマン公使など各国の代表も集い、地元福岡の参席者とともに、受賞者の栄誉を称えました。



和やかな雰囲気の中で乾杯!

文化サロン

受賞者の福岡滞在中、地元との交流事業として、これまでに広く市民との交流を深める「市民フォーラム」や若い感性と触れ合う「学校訪問」を行ってきましたが、本年よりこれらの事業に加えて、受賞者と大学などの研究者等を繋ぐネットワーク形成を目的とした「文化サロン」をスタートしました。いずれも自由な雰囲気のもとで活発な議論が交わされ、参加者のみならず受賞者にとっても知的刺激溢れる場となりました。今後も「文化サロン」の活動を充実していきたいと考えています。

日時	場所	参加者	内容
9月11日(木)	九州産業大学	20人	アン・ホイ氏と大学研究者との意見交換会
9月11日(木)	九州大学	16人	シャムスル・A・B氏と大学研究者との意見交換会
9月11日(木)	福岡アジア美術館	15人	フォリダ・パルビーン氏と大学研究者との意見交換会
9月13日(土)	九州大学	15人	サヴィトリ・グナセーカラ氏と大学研究者との意見交換会



アン・ホイ氏の話に聞き入る大学生

福岡アジア文化賞関連行事(授賞式・祝賀会、学校訪問、市民フォーラム、大学ネットワーク、特別上映会)への参加者は、約6,000人で、昨年比約1,500人増となりました。

国内・海外記者会見および報道実績

第19回受賞者決定直後(6/24)に福岡で記者会見を行い、受賞者および選考経過、授賞理由を発表しました。その後、7~8月にかけて各受賞者の出身地で、受賞者の記者会見を行いました。

香港では女優のカーリーナ・ラムさん、バングラデシュではラシエダ・K・チョウドリ文化大臣など多くの著名人の出席からも、現地における受賞への関心の高さがうかがえます。

会見の様子、そして「FUKUOKA PRIZE」の名が、様々な媒体を通して大きく報じられました。



香港でのアン・ホイ氏の記者会見風景



ダッカでのフォリダ・パルビーン氏記者会見風景

海外記者会見実績

受賞者氏名	都市名	開催日	参加者数	主な来賓
アン・ホイ	香港	8/7(木)	80人	・カーリーナ・ラム氏(女優) ・デージー・ラム香港政府観光局副理事長 ・佐藤重和日本国総領事(大使)
サヴィトリ・グナセーカラ	コロンボ(スリランカ)	7/21(月)	50人	・サリム・マルスフ最高裁判事 ・多賀政幸参事官
シャムスル・アムリ・バハルディーン	クアラルンプール(マレーシア)	7/28(月)	40人	・ハッサンシャブディンUKM副学長 ・ウンク・A・アジズ氏(第4回受賞者) ・ラット氏(第13回受賞者) ・堀江正彦日本国大使
フォリダ・パルビーン	ダッカ(バングラデシュ)	7/17(木)	130人	・R.K.チョウドリ文化大臣 ・井上正幸日本国大使

報道件数: 158件(国内96件、海外62件)

TV・新聞・雑誌・インターネットなどの他、機内誌やインターネット放送など様々な媒体を通して報道されました。全国紙への掲載も増加しました。

その他広報活動

ホームページ、メールマガジン、新聞広告等各種媒体を活用し広報しました。

各関係機関・団体、大学、レストラン等にポスター掲示やチラシ配布にご協力いただき、参加者募集を行いました。

福岡アジア文化賞ホームページおよびメールマガジン「アジアの風だより」

<http://www.asianmonth.com/prize/>

福岡アジア文化賞ホームページでは、今まで福岡が選んだ77名の受賞者について、その人物像・福岡での日々を紹介しています。「珠玉の言葉を今に」アジアの誇る文化の巨人たちの、記念講演やシンポジウムの記録を第一回から公開している講演アーカイブ。「より深く知りたい」知の探求者のための、書籍通販コーナー。「共に体験し、共に語る」ブログコンテスト作品にみる、市民の清新な感性でとらえた文化賞体験記。最新のイベント情報や、受賞者の横顔をお届けするメールマガジン「アジアの風だより」の発信とともに、福岡アジア文化賞の魅力を余すところなく紹介しています。







# 福岡アジア文化賞

## 歴代受賞者名鑑

### FUKUOKA PRIZE

#### Roll of Honor

#### 第1回 1990

**創設特別賞** 中国(作家)●  
**巴 金** BA Jin  
 『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

**創設特別賞** 日本(映画監督)●  
**黒澤 明** KUROSAWA Akira  
 『羅生門』はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

**創設特別賞** イギリス(中国科学史研究者)●  
**ジョゼフ・ニーダム** Joseph NEEDHAM  
 中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

**創設特別賞** タイ(作家・政治家)●  
**ククリット・プラモート** Kukrit PRAMOJ  
 大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

**創設特別賞** 日本(社会学者)●  
**矢野 暢** YANO Toru  
 日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

#### 第2回 1991

**大賞** インド(音楽家・シタール奏者)  
**ラヴィ・シャンカール** Ravi SHANKAR  
 豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

**学術研究賞** インドネシア(歴史学者・社会学者)  
**タウフィック・アブドゥラ** Taufik ABDULLAH  
 東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

**学術研究賞** 日本(社会人類学者)  
**中根 千枝** NAKANE Chie  
 アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

**芸術・文化賞** アメリカ(日本文学・文化研究者)  
**ドナルド・キーン** Donald KEENE  
 大著『日本文学史』をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

#### 第3回 1992

**大賞** 韓国(考古学者)●  
**金 元龍** KIM Won-yong  
 東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

**学術研究賞** アメリカ(文化人類学者)●  
**クリフォード・ギアツ** Clifford GEERTZ  
 インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

**学術研究賞** 日本(中国研究者)  
**竹内 實** TAKEUCHI Minoru  
 社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

**芸術・文化賞** フィリピン(建築家)●  
**レアンドロ・V・ロクシン** Leandro V. LOCSIN  
 東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

#### 第4回 1993

**大賞** 中国(社会学・人類学者)●  
**費 孝通** FEI Xiaotong  
 中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

**学術研究賞** マレーシア(経済学者)  
**ウンク・A・アジズ** Ungku A. AZIZ  
 マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

**学術研究賞** 日本(民族地理学者)  
**川喜田 二郎** KAWAKITA Jiro  
 ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

**芸術・文化賞** モンゴル(声楽家)●  
**ナムジリン・ノロバンザト** NAMJILYN Norovbanzad  
 モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

#### 第5回 1994

**大賞** タイ(考古学・美術史学者)●  
**スパトラディット・ディッサクン** M. C. Subhadradis DISKUL  
 タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的な位置づけに果たした功績は偉大。

**学術研究賞** オーストラリア(歴史学者)  
**王 廣武** WANG Gungwu  
 華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

**学術研究賞** 日本(東南アジア研究者)  
**石井 米雄** ISHII Yoneo  
 タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

**芸術・文化賞** インド(舞踊家)  
**パドマー・スブラマニヤム** Padma SUBRAHMANYAM  
 インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

#### 第6回 1995

**大賞** インドネシア(文化人類学者)●  
**クンチャラニングラット** KOENTJARANINGRAT  
 インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

**学術研究賞** 韓国(教育学者)  
**韓 基彦** HAHN Ki-un  
 独自の基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

**学術研究賞** 日本(歴史学者)  
**辛島 昇** KARASHIMA Noboru  
 刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

**芸術・文化賞** アメリカ(ビデオ・アーティスト)●  
**ナム・ジュン・パイク** Nam June PAIK  
 テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

#### 第7回 1996

**大賞** 中国(考古学者)  
**王 仲殊** WANG Zhongshu  
 古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

**学術研究賞** ベトナム(歴史学者)  
**ファン・フイ・レ** PHAN Huy Le  
 イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新発見をもたらした歴史学者。

**学術研究賞** 日本(国際関係研究者)●  
**衛藤 藩吉** ETO Shinkichi  
 中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

**芸術・文化賞** パキスタン(カフワリー歌手)●  
**ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン** Nusrat Fateh Ali KHAN  
 イスラム宗教歌謡カフワリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

#### 第8回 1997

**大賞** カンボジア(劇作家・芸術家)  
**チェン・ボン** CHHENG Phon  
 内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

**学術研究賞** インド(歴史学者)  
**ロミラ・ターパル** Romila THAPAR  
 独立以後のインド史研究を人類学の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

**学術研究賞** 日本(考古学者)  
**樋口 隆康** HIGUCHI Takayasu  
 フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

**芸術・文化賞** 韓国(映画監督)  
**林 権澤** IM Kwon-taek  
 韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

**大賞** 韓国(言語学者)  
**李 基文** LEE Ki-Moon  
 韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

**学術研究賞** アメリカ(人類学者)  
**スタンレー・J・タンバイア** Stanley J. TAMBIAH  
 タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

**学術研究賞** 日本(歴史学者)  
**上田 正昭** UEDA Masaaki  
 日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

**芸術・文化賞** インドネシア(舞踊家・舞踊研究者)  
**R. M. スダルソノ** R. M. Soedarsono  
 芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

**大賞** 台湾(映画監督)  
**侯 孝賢** HOU Hsiao Hsien  
 厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

**学術研究賞** 日本(民族学者)●  
**大林 太良** OBAYASHI Taryo  
 日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究者の泰斗。

**学術研究賞** タイ(歴史学者)  
**ニティ・イヨウシーウォン** Nidhi EOSEEWONG  
 斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

**芸術・文化賞** シンガポール(ヴィジュアルアーティスト)  
**タン・ダウ** TANG Da Wu  
 独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的發展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

**大賞** インドネシア(作家)●  
**プラムディヤ・アナンタ・トゥール** Pramoedy Ananta TOER  
 『人間の大地』をはじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

**学術研究賞** ミャンマー(歴史学者)●  
**タン・トゥン** Than Tun  
 厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

**学術研究賞** アイルランド(政治学者)  
**ベネディクト・アンダーソン** Benedict ANDERSON  
 世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

**芸術・文化賞** マレーシア(影絵人形遣い)●  
**ハムザ・アワン・アマット** Hamzah Awang Amat  
 マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第12回 2001

**大賞** バングラデシュ(経済学者)  
**ムハマド・ユヌス** Muhammad YUNUS  
 「グラミン銀行」を創始しマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

**学術研究賞** 日本(経済学者)  
**速水 佑次郎** HAYAMI Yujiro  
 市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

**芸術・文化賞** タイ(画家)  
**タワン・ダッチャニー** Thawan DUCHANEE  
 タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

**芸術・文化賞** フィリピン(映画監督)  
**マリルー・ディアス=アバヤ** Marilou DIAZ-ABAYA  
 民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

**大賞** 中国(映画監督)  
**張 芸謀** ZHANG Yimou  
 現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

**学術研究賞** スリランカ(歴史学者)  
**キングスレー・M・デ・シルワ** Kingsley M. DE SILVA  
 スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究者に多大な貢献をした歴史学者。

**学術研究賞** オーストラリア(歴史学者)  
**アンソニー・リード** Anthony REID  
 『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

**芸術・文化賞** マレーシア(マンガ家)  
**ラット** Lat  
 マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

**大賞** 日本(沖縄学者)  
**外間 守善** HOKAMA Shuzen  
 「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

**学術研究賞** フィリピン(歴史学者)  
**レイナルド・C・イレート** Reynaldo C. ILETO  
 東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

**芸術・文化賞** 中国(アーティスト)  
**徐 冰** XU Bing  
 独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通して東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

**芸術・文化賞** シンガポール(シンガーソングライター)  
**ディック・リー** Dick LEE  
 シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

**大賞** インド(サロッド奏者)  
**アムジャッド・アリ・カーン** Amjad Ali KHAN  
 インド古典弦楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

**学術研究賞** 中国(経済学者)  
**厲 以寧** LI Yining  
 中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

**学術研究賞** ネパール(民俗文化研究者)  
**ラーム・ダヤル・ラケーシュ** Ram Dayal RAKESH  
 ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

**芸術・文化賞** スリランカ(文化遺産保存建築家)  
**ローランド・シルワ** Roland SILVA  
 イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

**大賞** 韓国(民俗学者)  
**任 東権** IM Dong-kwon  
 韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

**学術研究賞** ミャンマー(図書館学者)  
**トー・カウ** Thaw Kaung  
 貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文獻保存学の泰斗。

**芸術・文化賞** ラオス(織物研究者)  
**ドアンクワン・ブンニャウオン** Douangdeuane BOUNYAVONG  
 ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

**芸術・文化賞** ブータン(伝統音楽家)  
**タシ・ノルブ** Tashi Norbu  
 ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

**大賞** 中国(作家)  
**莫 言** MO Yan  
 現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。

**学術研究賞** モンゴル(歴史学者)  
**シャグダリン・ピラ** Shagdaryn BIRA  
 世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

**学術研究賞** 日本(歴史学者)  
**濱下 武志** HAMASHITA Takeshi  
 アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点を当て、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

**芸術・文化賞** パキスタン(民俗文化保存専門家)  
**アクシムフティ** Uxi MUFTI  
 「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

**大賞** インド(社会・文明評論)  
**アシシュ・ナンディ** Ashis NANDY  
 臨床心理学と社会学を統合させた独自の的方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

**学術研究賞** タイ(人類学・考古学)  
**シーサク・ワンリポードム** Srisakra VALLIBHOTAMA  
 関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

**芸術・文化賞** 台湾(彫刻)  
**朱 銘** JU Ming  
 深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求め創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

**芸術・文化賞** 韓国(伝統芸能)  
**金 徳洙** KIM Duk-soo  
 「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端音楽を創造し続ける伝統芸能家。